
貧乏姫の結婚

透明な石

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

貧乏姫の結婚

【Nコード】

N1662P

【作者名】

透明な石

【あらすじ】

軍事国家ヴァルセイルの第一王子であり、次期国王のカイルに、毎日のように求婚してくる隣国の女王シルフィー。

一国の王であるはずの彼女だが、その日々は畑を耕し、魚をとり、イノシシを追い、海を越えて求婚をする。

そんな彼女と王子が結婚するかしないかでもめる話。のち話

隣国の王

「王子様、聞いていますか？」

緋色の椅子に座っている威厳ある男とその隣に座る黄金の髪を持つ美青年に向かつて、女はひたすら喋り続けている。

「実は私、良いアイデア思いついたんです！！わが国の復興策として、白銀の虹ツアーなんていかがでしょうか！！」

いささか呆れながらも、王子と呼ばれた青年は彼女に問いかける。

「白銀の虹？」

ひざまずき、それなりの礼節をわきまえていながら、その態度はなれなれしいものだった。

「ご存じないですか？博識と有名な王子様も、ああ、なんて嘆かわしい。アレですよアレ」

アレといわれてわかるのなら、聞きはしない。心の声を思わずに口に出していたが、目の前の女は気にすることなく満面の笑みを向けてくる。

「雪国でしか見られない、奇跡のことです。恋人同士が、親の目を盗んで夜中に家を抜け出し、体を寄せ合って暖を取りながら空を見上げると、闇夜を彩っている、アレですよ」

ああ、オーロラのことか……。これも口に出していた。

「そう、おお、ローラ!!!!!!!!!!」

女が急に叫ぶと、扉からメイド長のローラ（推定年齢45）が出てきた。

「何かご入用でしょうか、フィルメリア王国女王シルフィー様」

そう、彼女は一国の王である。茶色い髪をボサボサにまとめ、ドレスと思われるその布切れは色あせており、その肌は日焼けをしている。

「いえ、ここは突っ込みどころです、殿下。本当にローラが出てきちゃまずいです」

カラカラと笑いながら、手をパタパタと振っている。

「なるほど・・・」

隣にいた父王が何を思ったか、頷いている。こんなやつ言葉を真に受けちゃいけません。毒されています、父上。

「それで何が言いたいんだ、シルフィー殿」

何か考え込んでいる父に変わって、王子が問う。

「ぜひともわが国へ観光旅行に来てください!!」

また同じオチか・・・。

「断る」

ガクンと音がするほどに落ち込んだ女は、肩を落としたまま背を向けた。

「そろそろ時間なんで、国に帰ります」

「ああ、気をつけたまえ」

とぼとぼと歩く女を見て俺はほつと息を付く、朝一でなんでこんな女の話に付き合わなきゃいけないんだ。だいたい、いつも同じ話ばかりなのに毎日毎日・・・

そういえば、今日はないなあ、最後の

「あ、忘れていました！！王子、結婚してください」

「断る」

これが、我が城の日常だ。

日の出とともにメイドにたたき起こされ、そのまま着飾され、謁見の間に放り出され、さらに、変な女の話の小一時間ほど聞かされる。そして、わけもわからないまま帰っていく。いい加減にしてほしい。

それでもむげにできないのは、彼女が隣国の王であるからだ。

我が国ヴァルセイルは大陸有数の国家に対し、彼女の国フィルメリ

アはその北に位置する島国だ。世界地図で表すと点でしか表示されない小さな島だ。

彼女はそこから、毎朝、アヒルちゃんGo（号とかけているらしい）にのってやってくる。一度だけ見たことがあるが、気の抜けたアヒルの顔のついたボートでもすごい勢いで海を突っ切っていった。しぶきで海に白い線がいつまでも残っていたのが忘れられない。

それで、彼女がわざわざ毎朝海を渡ってまで我が城に来ているのかというと、まあ、さっきもいつていたが、ヴァルセイル第一王子にして唯一の王位後継者である私カイル・ヴァルセイルに求婚しているのだ。

朝日と命のきらめき

「はあ」

彼女も気が緩んだんだろう、無意識のため息がこぼれてしまったようだ。だが、そんなの僕には関係ない。朝っぱらから付き合ってたっているのに、溜息とは何さまだ。

「いかがした？シルフィー殿」

「いえ！！なんでもございません、失礼いたしました。それで、先程の話ですが、うちの湖（沼といったほうがいい）の泥で顔を塗りたくると、肌がちゅるんってなるんです。これまさに、エコでビューティーなわけですよ。うちの湖、泥っばいんで取り放題ですし、ぜひヴァルセイルで商品化……」

なんでもないというふうには、いつもの下らん話をしているが、彼女の顔はどこか疲れており、目もとにはくつきりとくまもできているせめて、淑女なら化粧なりなんなりで隠せばいいものを。ちなみに隣の父王は、「うむ」とかいいたが本気で商品化について考えている。

「シルフィー殿」

「はい？」

僕の呼びかけに、不思議そうな顔をして返す。

「ずいぶんと顔色が悪いが、何かあったのかな？」

僕の言葉の意味に気付いたのか、逃げられないと思ったのか、彼女は困ったように笑うと、

「お恥ずかしい話なのですが、…昨夜は一睡もしていないんです」

だったら、こんなところに来てないで寝てろよ。とは思ったが、そこを追及したところでこっちの気が抜けるだけなのでやめた。

「…実は、命のきらめきを知ったのです」

は？と、ついドン引きしてしまった僕と違って、父は興味深そうに身を乗り出した。

「昨夜は、星ひとつなく月も雲に隠され、光を失った夜だったので」

しらん。そんなもん。

「私は普段と同じように夜の見回りに出ていたのです。ただ、暗すぎる世界に何か嫌なものを感じました」

一国の女王が見回りとは…どれだけ人手不足なんだろう。

「夜道を歩く私は、悲鳴のようなうめき声を聞いてしまったのです。普段なら聞き逃してしまいそうな、小さな声でしたが、その日はとても鮮明に聞こえたのです。私は、その声のするほうに向かいました。そこは国营の農場の飼育小屋でした」

「飼育小屋から悲鳴？」

事件じゃないか、

「そこには妙齡の女性が苦しんでいました。藁に身を投げるように倒れて、全身から汗を流してうめいていたんです。最初は私もあせりましたが、すぐに状況を理解しました」

切羽詰まるような彼女の表情に、思わず僕まで話にのめりこみそうになっていた。もちろん、父王はこぶしを握り締めて彼女の話に聞き入っている。

「彼女のおながが大きかったのです」

跪いて話していた彼女もついに立ち上がり、身振り手振りで語りだした。

「私はすぐに医者と呼ばうと思ったのですが、我が国唯一の医者であるアシュランは学会参加のために不在、こうなれば国を治める私が彼女を救うしかない！！そう思ったのです」

いやいや、だれかよぼうよ、そこは。

「私は、アシュランから習った呼吸法を彼女に教え、必死に彼女に語りかけて、励まし続けました。しかし、なかなか子供は出てこない。それどころか、時間がたつにつれ彼女の体力もなくなり、絶望が脳裏をかすみ始めました」

もう世界に入り込んでいる彼女と父王を僕は呆然と見ていた。

「青白い彼女の顔を見ると、彼女の境遇が思い起こされました。彼女は幼いころ両親と引き離され、一人ぼっちでこの国にやってきたのです。昨年、ようやく心を許せる殿方と出合い、子供をなしたのに、つい2か月前、彼女の旦那様は狼に襲われ殺されてしまったのです。…このまま彼女は、この子供を産んでもいいのだろうか、一人で子供を育てていくはどれだけ大変だろうか…「あきらめるな！生きる！！」なんて平気で口走っていた私はどれだけ愚かなんでしょうか…」

うなだれる彼女。笑顔以外の彼女の表情は珍しい。

「その時、小屋に光が差し込めたのです。闇夜が明けたのです。その瞬間、彼女の体から子供が出てきました。私は、その子に近づこうとしましたが、その子は最初から私など見えていない様子で、よろよろと立ち上がり、母親に寄り添ったのです。彼女も安心したのでしょうか。母親となったその喜びに穏やかにほほ笑み、そのつばらな瞳から涙が一つ。光り輝いたのです！！！」

話はクライマックスを迎え、彼女もどこか遠くを見て目をうるませている。隣から「ぐすっ」という音が聞こえたが見ないことにした。

……………ん？ちょっと待て。

よろよろと立ち上がり？思わず口に出してしまった。

「はい、ローラが立った！！並みに感動のシーンでございました」

背後で誰か立つ音がしたが、振り返るのはやめた。すまない、メイ

ド長の君にかまっている暇はない。

「生まれたばかりの子供が立ったか!！」

あり得ん!!

「はい、まさに奇跡の子!! 私は王として、彼に世界で認められたものの名をつけました」

「コーベ・ギュー!!と」

「牛かよ!!」

いつになく疲れた会談。気持ちよさげに演説するだけしといて、いつものように

「王子様、結婚してください」

「断る」

と応報して、颯爽と帰って行った彼女。

空腹のはずなのに、なかなか食が進まない。父も同じようですつきからスープばかりいじっている。

「カイルよ。お前はと思う?」

重々しい言葉に、どうこたえるべきか迷う。正直こんなことにつきあわされてうんざりだ。だが、父はそうでないようで、彼女のことを気に入っている。

「僕は…」

言い淀んでしまうが、初めから父王は僕の答えなど求めていなかったようだ。

「昨夜、お主は何をしておった？」

「昨夜は、会議に出ていましたが」

さすがに、彼女のように徹夜というわけではないが、睡眠不足だ。

「そう、軍法会議だ」

次期国王である自分に与えられた仕事だ。今世界は穏やかだが、いつ戦争が起きてもおかしくない。重要な役職を任せてくださることに誇りを感じている。

「お前が、人を殺すことを考えている間に、シルフィー殿は命が生まれることについて考えていた。どちらが王として正しいのか」

まるで自分を否定されているようで、思わず立ち上がってしまった。軍がなければ、国は敗れる。国が敗れば、民が死ぬ。軍を軽視することなどできない。

父王は、僕の心情をわかっているようで、手で抑えるようなしぐさをした。

「そんなことはわからない。でも、人としては命を慈しむほうではないか？私はそう思う」

父はもう食べる気はないようだ。ゆっくりと立ち上がると、優しい目で僕を見る。

「人の上に立つ。お主も私もそういう運命に生まれた。そして、彼女もだ。王として、人でなくなる時が来るかもしれない。その時、お前はどうか生きる？」

もし我が国を脅かすものがあれば、僕は迷わず兵を出す。

国を守るために、民を守るため、

血が流れても、兵を出す。

でも、忘れない。

この世界のどこかで、命を慈しみ、涙を流す人がいることを。

嵐のあと

風がゴウゴウと吹き付ける

雨は空からの槍のように突き刺してくる

雷が大地を打ち付ける

「王子」

呼ばれて、初めて自分が呆けていたことに気付いた。

「ああ、ローラか」

メイド長のローラはここに勤めて長い。僕が生まれる前からこの城にいる。ガラス越しに荒んだ空を見ていた僕に合わせるように、ローラも溜息をついた。

「ひどい嵐ですね」

「ああ、街に被害が出ねば良いが」

王子らしい答えを返したつもりだが、ローラはくすりとわらうと、

「こちらは街の方角ではありませんよ」

「え？」

確かにその方向に街はない、あるのは海。その海の先にあるのは彼女の国。だが、何も考えずに、外を見ていただけだ。別に他意があったわけじゃない。

なぜかうろたえてしまった。

「そんな隠さなくてもいいんですよ、王子」

と、含み笑いをしながらローラはうなづいていた。だから、違うつて。

「本当に無事だといいんですが、…」

それからしばらく彼女は来なかった。

嵐の影響で港に被害が出たらしい。漁を生業としている人も多い。人手不足の国である以上、王自ら復旧作業に出向いているみたいだ。幸い港以外の被害もなく、復旧も数日で終わるとのことだ。

その間の会談はできないという謝罪の手紙が来た。

そのためか、メイドに朝起こされることもなく、突っ込みを入れることもない日が続いた。穏やかで平和な日々なのに、どこか物足りなかった。

だが、それも数日で、今日は日の出とともに起こされた。

「心配をおかけしました!!」

朝からテンション高いなあ。

「ようやく落ち着いたので、王子の顔が見たくなって、来ちゃいました」

来ちゃいましたじゃないだろう

「相変わらず王子様は素敵ですね」

一通りキャツキヤとはしゃぐと、彼女はたたずまいを直し、父王を見上げた。

「ヴァルセイル王。今回の支援、誠にありがとうございました。我が国の民もヴァルセイル王の温情に深く感謝しております。フィルメリアの代表として、このご恩に必ず悔いることをお約束いたします」

フィルメリアに支援？自分の知らないことに驚き、隣の父王を見るが、僕に目を与えることはなかった、

「うむ、当然のことをしたまでだ」

威厳ある父王に感動する。

シルフィーも同じようで、深く頭を下げた。

「それでは申し訳ありませんが、今日のところはここでお暇させていただきます」

珍しく下らない話もせず帰って行くとする彼女を止めたのは父王だった。

「シルフィー殿もお疲れだろう。今日は、我が城に泊っていかれよ」

その言葉に彼女も驚いたようだ、隣にいた僕でさえ驚いている。

「申し出はうれしいのですが、執務のほうが滞ってしまして」

少し恥ずかしそうに答える彼女を、父王はなおも追い詰める。

「ならば、さらに人を寄越そう」

譲る気はない父王に彼女は一瞬固まった。だが、こうなった以上、彼女に選択肢などない。

事実上フィルメリアはヴァルセイルの従属国だから。

「かしこまりました。お言葉に甘えて、今日は城にお邪魔させていただきます」

色あせたスカートを広げて挨拶する彼女は、確かに上品さを感じ取れた。

そして、ヴァルセイル城は呪われた。

「あちよー」

「『あちよー』」

現在AM10:18、彼女が我が城に来たのはAM9:02。会談の時間を差し引いても、わずか数十分。白き鉄壁と言われた我が城は、目をそむけたくなるような蛍光色の黄色の服に横に黒いライン

のついた服を着た集団に乗っ取られていた。

庭に等間隔に整列し、真剣なまなざしで前を見ているのはわが国のメイド、料理長、え、近衛隊長！！何してんだ、あんた！？

身分も性別も年齢も問わず全員黄色い服を着ている。

「一同、刮目！！」

大きな声を張り上げ、集団の前に仁王立ちしているのは、まあ、見なくてもわかるが、シルフィーだ。正直目をつぶっていたい。無論、彼女も黄色と黒ラインだ。

「そろそろ体も温まってきたでしょう。何事も、ことをなすためには準備というものが必要でございます

す。何よりも、計画性のない資産運用ほど危険なものはありません。まずは自身の収入とリスクのバランスを考え、目標を定めることが必要であり……」

何の話をしているんだ。

「ということ、我らは自身の身を守り、大切なものを守るためにも、力が必要なのです。その力を十分に発揮するためにも準備を怠ってはいけません。力を発揮できないがゆえに、大切なものを守れなかった、そんなつらい後悔なんてしたくないでしょう！！だからこそ、命がけの戦いの際には、恥も見聞も捨て、素直に、敵にいいなさい、「じゅんぴのじかんをください！！」と。それが、生へとつながるのです。よろしいですか」

「『はい』」

息びったりだな、黄色い集団。

「では、講義に移りましょう。そうですね、たとえばの話です。貴方の目の前に、筋肉隆々の大男が、青空のように澄んだ瞳で立ちただかったとしましょう」

後半の設定いらないだろ。そもそもどんな瞳だよ。

「貴方はそのこぶしだけで、立ち向かいますか？立ち向かうことができますか？答えは、否です。貴方の力ではその男を傷つけることすらできません。はつきりいつて愚かな行為でしかない」

まあ、メイドや料理長なら腕力ないだろうし、そうなるだろう。って、近衛隊長なんでメモとっているんだ？最近鎧が重いか愚痴っていたけど、この人に聞くのは間違っているよ。

「力のないものでも大男に勝てる特別な方法を身につける必要があります。我らが最終奥義は、向かってきた敵の攻撃をよけ、相手の足の小指を踏みつけ、うろたえた相手のうなじを押し、背後にまわり、脇をこちよこちよするのです」

無理だろ。普通に倒すより無理だろ。っていうか、うなじを押し意味あるのか。

「さすがに。皆さんにいきなりこれをやれとは言いません。今日は、基礎の一つを習得してもらいます」

そう言い切ると彼女は、そのまま手を空高く掲げ、人差し指と中指以外の指を握った。俗にいうチョキだ。

「鼻フックです！！！！」

一国の王が、高らかに宣言していいものなのか。

さすがにその言葉にうろたえたのか、メイドたちはたじろいでしまっている。

「躊躇は命取りです！！さあ、皆もやりましょう」

「ぬん」

「」「ぬん」「」

「ぬん」

「」「ぬん」「」

「そこお、指の角度が違う！！！やり直し！！！」

激しい叱咤が飛ぶ。これはシルフィーの声ではない。シルフィーの隣に竹刀を持って仁王立ちしているローラだ。なんでそのポジションにいるんだ、君は。

「は、はい。…ぬん！！！」

鼻フックをする、黄色い集団。青空のもと、広い場内に響く「ぬん」の音。

そこへ、父王が大臣たちとの会議を終えたのだろっ、庭にやってきた。さすがのシルフィーもこの国の王に止められたら、従わざるをえまい。

さあ、父王。威厳を見せてください！！
って、あれ。

固まっている。

…… チョキ見て考え込んでる。
そっちに、のまれないで！！

その後、ヴァルセイル国開催の武術大会で、黄色い集団が善戦したのは別の話。

ピアノと人形

真つ暗な世界。

まるでこの世界はすべてを失ったかのように、何も見えなくて、何も聞こえない。

傍にいるはずのひとを探してみるが、

この闇の世界に映るものなんてなかった。

その闇の中、ふわりと光が一つ浮かぶ。

ろうそくで火をともしたようだ。

その日に照らされて映るのは、一人の女。

ろうそくの明かりだけではどんな色をしているか分からないが、ドレスを着ている、きつと身分のある女だ。

だが、その髪は乱れ、痩せており、その目はろうそくの光で揺れているように見えた。

もうひとつ、光が見えた。

今度は自分の横にろうそくが灯され、燭台とともに手渡された。

そしてもう一つ、そのろうそくは、隣の椅子に座っている父王に渡された。

「さあ、始めましょう」

やけに淡々とした声で始まりを告げるのは、彼女の声…

って、朝っぱらから何やってんだ！

今日もメイドにたたき起こされ、人形のように着飾られ、王座へと放り投げられた瞬間、

シャー！！

部屋中のカーテンが、メイドに寄って一斉に閉められた。

なにをしているんだ、そう声をかけた瞬間には、部屋中は真っ暗で足元はおろか何も見えない状態になっていた。

そして、今に至る。

ドンドン！！

ぴゅーーーーー・・・ひゅるるる

急に響いた音に驚いて、横を見ると、なぜかメイド長ローラが太鼓たたきながら、笛を吹いている。芸達者だな。

シャリンッ

金属のこすれる音が響く、その音の方向を見ると、近衛隊長が大真面目な顔して剣をこすり合わせている。ちょっとお前は何遊んでいるんだ！！

「昔々、あるところに」

普段よりも、しっとりとした低温で彼女が語りだす。

「ごく普通の女学生がおりました…」

ごくろり…この緊迫した空気に思わず喉を鳴らしてしまう。

「彼女は、音楽が好きでした。特にピアノを……。でも、自分にはピアノの才能、音楽の才能などないことは、彼女は重々承知しておりました。だから、ピアノの道に進むことなどつゆほどに考えておりませんでした。それは、ピアノから離れる理由にはなりませんでした」

なぜだろうか、一人の少女が楽しそうにピアノを弾く様子が頭に浮かぶ。

「彼女は、毎日、それこそ毎日、音楽室に通っては、一人、ピアノを弾いておりました。時間がある時なら、朝も夜も問わず……」

そこで、彼女は眼を伏せる。

「ある日、彼女はいつものように、音楽室に向かいました」

そこでためるように彼女は言葉を止めた。

「…いつもなら誰もいないはずの音楽室には、一人の男の子がいました。そして、彼は一生懸命にピアノを弾いていました。それは、彼女の聞いた事のない曲でしたが、彼がとても上手なのはわかりました」

「『わあ、素敵。なんていう曲なの』」

乾いた声が室内に響いた。ただの称賛のセリフなのに背筋に冷たいものが走る。

「男の子は誰かに聞かれているとは思わなかったようで、彼女の存在にとっても驚きましたが、彼は曲の名前を覚えてくれました」

「『ピアノと少女』」

「『いい曲ね、初めて聴いたわ』」

「『そう、じゃあ、教えてあげようか？』」

「彼は、人のよさそうな顔をして彼女に笑いかけました。彼女は今までピアノと一緒に弾いてくれる人もいなかったたので、純粹に彼とピアノが弾けることがうれしかったのです。彼女はもちろん頷きました」

ほう、その男の子が幽霊か何かで、彼女が殺されるとかいう話か？まあ、ありきたりだが、話し方がなかなかうまいので退屈しない。

「それから、彼女は前にもましてピアノを弾くのが楽しくなりました。だって、音楽室に行けば、なぜかいつも彼がいて、ピアノを教えてくれるのです」

彼女はニコニコとしながら続ける。

「それからしばらく経ちました。男の子との練習の成果でしょうか、彼女のピアノの腕前は格段に上がり、彼から教えてもらった曲も弾

けるようになりました」

おっ、そろそろ悲劇の始まりか？

「その日も、彼女は授業が終わるとすぐに音楽室に向かいました。……ですが、その日はなぜか男の子はいませんでした。珍しいこともあるわね、と思って少し待っていました。彼はなかなかやってきません。時間ももったいないので、彼女は一人でピアノを弾くことにしました」

「ところが」

「昨日まで弾けていた、あの曲、彼に教えてもらっていた曲が全く弾けないのです。指も動かなければ、最初にどの音を弾けばいいのかもわかりません。あわてる彼女にゆっくりと声がかかる」

「『だから、いったのよ。ピアノじゃ飯は食っていけないって』」

「それは紛れもなく彼女の母親の声でした。彼女の母親は彼女がピアノばかり弾いていて、勉強しないのが気に食わなかったのです」

「『ほら、あの男の子、名前を忘れたけど、あの子も消えてもらったわ』」

「『お母さん、もしかして…』」

「母親は彼女の耳元に唇を寄せると、囁きました」

「『これでピアノは忘れられるわね』」

「彼女は恐る恐る自分の手を見ると…！」

そこで彼女は自分の手を顔のあたりまで晒す。

「指が無くなっていたのです…！」

その手には指がなかった。

フッ

蠟燭が消され、室内の闇が深まる。
そして、静寂。

「わあああああああ…！！」
男の野太い声が広がる。

フッ

隣の明かりが消えた。

…え、父王？どういことですか。

まあ、深くは突っ込むまい。父王に対する何かを失ってしまいそう
だ。

「次は、…王子、貴方です」

闇から聞こえる彼女の声はまるでをさばく神のようだ。

確かに彼女の話し方はなかなか良かった。正直怖いと思った瞬間も
あった（男の悲鳴）。

最後の袖に手を隠して、指が無くなっている表現もよかった。

ろうそくの炎が、かすかな風に揺れるのを見ながら話す。

とある村で、人形作りを生業とする職人がいた。職人の腕はよく、
人柄もよかったので、たくさんの注文を受けていた。そろそろ、注
文を受けるのをやめようかと思っていたところ、身なりの悪い男が
慌てて、職人の作業場に入ってきた。

「済まない。人形を売ってくれないか？」

ひどく切羽詰まった状況なのだろう、必死の男に職人が考えた。

「申し訳ない。今の仕事で俺は手いっぱいなんだ。他をあたってく
れないか」

「そんな、…そこに綺麗な人形があるじゃないか」

確かに職人の横には美しい人形が置いてあった。

「ああ、これか、これは明日来るお客さんに頼まれていたものなんだ。だから、売ることはできない」

「たのむ！！頼むから売ってくれ」

男の必死さに職人は悩んだが断ることにした。男の身なりが悪いので、代金が払えないかもしれない、そんな理由が一瞬頭にかすめたが、どの道すぐに渡せる人形はなかったのだ。

次の日。職人が朝目覚めると、今日来る客のために置いてあった人形が無くなっていた。昨日の男だ。そう思って、職人は腹を立てたが、玄関に紙が一枚落ちているのを見つけた。

『人形を盗んだのは、私です。ですが、必ず返します。』

きつと、慌てていたのだろう、流れるよう見にくい文字に、職人は呆れ、盗まれたものはしょうがないと、先方に謝り、事を終えた。

そして、職人はそのことをすっかり忘れてしまった。

それから、数年。職人には妻ができた。その妻のおなかには子供がいた。すでに臨月でいつ生まれてもいい状態だった。だから、職人

も毎日が楽しかった。幸せと言って差し支えないほどに、……。

「おい、生まれるそうだぞ!!」

いつものように人形を作っているところへ、友人が走ってきた。それを聞いた職人も裸足のまま作業場を飛び出し、妻のもとへ向かった。

家にたどり着くと、様子がおかしいことに気付く。人が集まり、女たちがせつせと動きまわっている。夫である職人が来たことが伝えられたのだろう、産婆が家から出てきて、職人に告げる。

「難産だ…おそらく、子供はもう…」

ひどくつらそうな産婆に、職人は責めることはできなかった。

「あいつだけでも助けてやってくれ」

「ああ…」

そういつて、産婆は妻のもとにいった。

夫は、子供がだめだったと知り、気を落とすが、自分よりも妻の方が苦しんでいるのだと持ちこたえ、妻だけでも生きてくれるように願った。

その時

「キャーーーー!!!!」

家からひどい叫び声が聞こえた。この声は妻じゃない、それに願っていた子供でもない。あの産婆だろう。

「何があつた!!」

男が中に入ると、腰を抜かしている産婆とその手伝い。寝ているのは妻、

そして、妻の腹から出てきたであろう、人形が転がっていた。

あの盗まれた人形と同じ顔をしていた。
職人の脳裏に言葉が浮かぶ。

必ず返します。と……

シィ……—ン

静寂

静寂

静寂

つて、なんでそんなに静かなんだよ。

怖いだろ!!結構怖いぞこれ!!

慌てて周囲を見ると、

シルフィーは顔をひきつらせており、

隣からは、いかにも落胆しました、みたいなため息が聞こえ、影で控えているメイドたちは、何やらぼそぼそ話している。

な、なに、この残念そうな雰囲気。
せつかく放してやったのに、何なんだ。
苛立ちを込めてろうそくを消す。

フッ

「あ、あの、王子？」

彼女が場を取り繕うように聞いた。

「結婚しません？」

「…断る」

これまでで一番屈辱的だ。

「そうですか、では、皆さま、ごきげんよう」

そそくさと帰るシルフィー。このいたたまれない空気を作っておきながら、さっさと逃げるとはどういうつもりなんだ。

それでは戻りましょう、と父王に声をかけようとした瞬間気づいた。

ろうそくは、3本。シルフィー、父王、自分しかもっていなかったはずだ。

そして、シルフィーは自分が話し終わって、すぐに消し、父王もそのあと消した。そして、僕自身も話し終わって消したはずだ。そのあと誰も動きはなかった。

今部屋を照らしているろうそくは誰が持っている？

「あああああああ! ! ! ! !」

新しい文化と疑問

「ご存知ですか!!」

ウキウキとそれはもう城に響かんばかりの声（実質響いていた）で彼女は尋ねた。いや、もう疑問形でもなかったが。いきなり言われてもわからないので、いつもどおり曖昧に流そうと思ったが、彼女は譲らなかった。

「12月25日は赤い服着た白ひげの老人がシカに乗って空を飛び、夜中に煙突から不法侵入し、子供の枕もとにプレゼントを忍ばせる日なのだそうです」

は？なんだその意味のわからん話は。

「はるか西の雪国での、伝統文化だそうです」

そんな不審な行為が伝統文化なのか。老人も大変だ。って、なんであご触っているんですか、父王。貴方、老人じゃないでしょ。

「はい。もとは細身でロン毛の立派なことをいう人が生まれた日をお祝いする日らしいんですが…」

細身でロン毛…いや、何も言うまい。

「その日に、とある優しいおじいさんがキャンプファイヤーをして、身寄りのない子供にシカ肉を食べさせたのが、由来といわれています」

なんだその老人は、しかし、なぜシカ肉？

「ですが、今現在、核家族化が進み、老人と一緒に住む子供はいません。そのため、老人たちは子供たちにプレゼント、もとい、シカ肉を送ることができなくなってしまったのです。これこそ、時代の変化としか言いようがありませんが、時代とともに変わっていくのは人であり文化――！」

ものすごい剣幕で話しているが、いったい何がしたい？

「子供にプレゼントを渡したい――！そう願う老人たちが集まり、口伝えに徐々に大きくなり、いつしか謎の集団と化したのです」

その老人たちが、赤い服着てシカに乗って、煙突から不法侵入するのか？いや、危ないし、意味がわからん。

「彼らは、街中のもみの木を電飾で飾り、かわいらしいリースを作り、ケーキを売ったり、この雪に埋もれた冷たい冬を盛り上げていったのです」

ほう、それはいいことかもしれない。薄暗い空、冷たい雪、冬は寒く人にとってはつらい時期でもある。それを、老人たちが先手を取って盛り上げていくというのは、珍しくもあり、我ら若者も見習わなければならない。

「そして、ある年の12月25日」

急に彼女の表情が鬼気迫るものになった。

「一人の猛者が現れた！！」

大きく手を振りあげ、立ち上がる彼女。

「彼は、その心の情熱の焰を表すがごとく赤い衣をまとい、その子供のような純粋な心を表すがごとく白いひげを蓄え、友の赤い鼻を持つシカとともに、民の前に立ちはだかった！！」

それが最初にいていた話か…というか、シカの鼻って何色だっけ？

「彼は颯爽としかにまたがると、そのまま屋根を飛び回り、一軒の家の煙突の前に飛び降りた」

なぜか、何かにまたがるようなポーズをとり、辺りをぴょんぴょんはねる彼女。冷静に見るとかなり滑稽な

状況だ。というか、一国の王が何やってんの？

「その家には、2人の兄弟がいました。二人は貧しく、今日のご飯もままならない状態でした。しかし、二人はそんな環境にもめげず一生懸命働き、その姿は周りの者たちを感化させるほどのものでした。つらくも、兄弟二人で一生懸命に生きている二人に、突然現れた老人！！その老人は、二人の枕もとにプレゼントをそっと置き、子供たちを起こさないように、一言…」

「お年玉も込みだから…」

そこは、「メリークリスマス」でしょうが！！

なに、夢を奪うようなことさやいているの？つていうか、その老人あんなに手間をかけて、プレゼント置いて、いいたいことそれ！？
だいたい、お年玉は別だから！！

「その老人の名は、サンタクロース。世界に名だたる子供たちの夢を運ぶ妖精とも言われています。実在するのも謎ですが、私たちはサンタクロースの意思を継ぎ、この記念すべき日をクリスマスと名付け、空高く羽ばたくのです！！」

高らかに宣言すると、彼女はドレスの胸元をわしづかみにした。別にいやしい目で見ていたわけじゃないからね。

バサッ

鳥が羽ばたくような大きな音とともに、ドレスがふわりと空に浮かんだ。

そこに立っていたのは、赤い服を着て、白いひげをつけた彼女だった。

「いざ、ゆかん！！子供たちの夢を運びに！！」

彼女が叫ぶと、周りにいた者たちが一気に服を脱ぎ始める。

バサッバサッバサッ……

なぜか皆、服の下に赤い服を重ね着していたようで、誰一人として足並みを乱す者はいなかった。

「第1部隊は西地区を、第2部隊は東地区を、メイド隊は城下町、調理隊は補給運搬を！！」

的確な指示を出すのは、ローラ。今回静かだと思っただけのこと
していたのか。

彼女はその様子を楽しそうに見つめると、プレゼントの入った袋を
担いで、僕に振り返る。

ああ、いつものか…そう思ったが、彼女はにこりと笑い。

「王子、行つてきます」

ああ…。と氣のない返事しかできない俺と違って、彼女はそのまま
背を向けて出て行った。

騒がしい場内に乗り遅れた僕は、なんとなく隣を見る。

そこには一国の王たる男が深い色をした目で皆を見ている。

「父上」

声をかけたが、父王は凜とまっすぐに前を見ているだけだ。

「…あの」

「…なぜ、シルフィー殿がこのような話をしているか、考えたこと
があるか？」

急な言葉に、追いつけなかったが、何とかこたえる。

「それは…、彼女が楽しみたいからじゃないでしょうか」

「きっとそうだろう。だが、それならば自国でやればいい。フィル
メリアなら彼女に逆らう者はいない。だが、それでも彼女はこの地

を選んでいる」

そこで父王はもう一度考えるように、下を向く。

「広めているのだよ。このどうしようもない文化を、」

父王から目を離し、前を見ると、笑いあっている兵士がいた。

「子供たちに老人がプレゼントを贈る。弱いものが弱いものに贈り物をする。それは愛おしいが故。だが、数年前、たった数年前までは、こんなことはできなかっただろう」
その理由はすぐにわかった。

「…戦争」

わが軍の大勝利によって収まったが、確かに国は、いや、人は荒れた…。父王が静かに頷いた。

「どんなに法を定めても、兵を集めても、国が豊かになっても、争いが無くなることはない。だからこそ、今を楽しめる文化が必要だ。人が人を想いあえるような、幸せも悲しさも受け止められるような、そんな文化だ。…くだらないと切って捨てるのはたやすい。だが、生みだし育てるのははるかに難しい、それが」

ふわりとかすかな風が、頬をかすめる。横を見ると、茶色の全身タイツを着た父王がりりしい顔で、前を見ている。そのままゆつくりと、鹿の角のついたタイツをかぶる。

「豊かな心だ」

そうして、ヴァルセイルに新たな文化が花開いた。

その夜。

眠れない。

なぜだろうか、ひどく疲れているはずなのに、全く眠れない。

体が睡眠を欲しているのはわかるが、目がさえ、頭が痛いくらいに動いている。

はあ、

ため息をついて、寝返りを打つ。

カチャ

ドアの開く音が聞こえる。こんな時間に誰だろうか、薄眼を開け、時計を見るが、すでに日付は変わっているようだ。

だれ？そう聞こうと思ったが、おそろおそろ部屋に入ってくるその気配に、枕元の剣を握るだけで、じっと待つことにした。

足音を忍ばせ、僕のベッドの隣にまで来ると、その人物は、ベッド

に腰掛けた。

なんてやつだ。不敬罪で首を落としてやろうかと思ったが、かすかに香る潮の香りが、思いとどまらせた。

最初に、思いつきり怒っておいて帰らせればよかった。完璧に起きるタイミングを失った僕には、寝たふりをするしかできない。

ずっと彼女は枕元に何かを置き、なぜかクスリと笑った。

そのまま、彼女はあるうことが、僕の髪をすき始める。

柔らかく、暖かい手が頭をなでるのが、どこか懐かしくて、安心した。

そのまま、まどろみの中ゆっくりと意識が落ちていくのを感じていると、小さな声がこぼれおちるかのように聞こえた。

「本当に、そっくり」

暖かい手は最後にそつとほおをなでて、そのまま消えていった。すべての気配が消え去り、何もいなくなった部屋。穏やかな夜に一人、

「そっくりって誰に!？」

眠れなくなった。

軽やかなステップそして大きな落とし穴

「おっはようございます！！王子様、お加減いかがですか？」

朝っぱらから元気だなあ。昨日夜中まで活動していたというのに、やはりというかなんというか、やはり、朝っぱらからたたき起こされ、いつものように、着飾され、玉座に放り出された。

「さすが王子様、たとえ目の下に真っ黒なクマができていても、顔がむくれていても、素敵です」

それ、ほめてないから。…そんなにひどいのか？僕と対照的に彼女はいつもどおり元気いっぱい、白鳥の湖を踊っている。ちなみに王子役はローラだ。朝から濃いいこの二人。なに踊っているんだ？これは口に出してしまった。

「何って、今夜のダンスパーティーの練習ですよ。王子」

そして、王子は何を踊られるんですか？

と踊りながら答えてくれた。その言葉を聞きながら僕は…

すっぱり忘れていた！！

と焦っていた。

こんなことをしている場合じゃない。えっと、とりあえず何着ていくかはローラに任せよう。あと、どこの国から来賓が来るか、彼らの趣向とかも調べておかないと、ああ！！昨日の仕事が山のように

残っている。昨日の僕はいつたい何をしていたんだ！！（混乱中）
そうだ、忘れていた。

「ダンスパーティーってバレエ踊らないから！！」

突っ込みがないとこの場は永遠に続く。そして、この場をしめられるのは僕だけだ。さっさと終わらせよう。
そう思って口を開こうとすると、

「ご安心を」

先ほどまで、優雅なバレエを踊っていた二人は、手を組み、抱き合い、そして軽やかなステップを踏んだ。

タッタッタ、二人の足並みは、音楽などなくてもぴったりで、ターンはふわりとシルフィーのドレスが揺れる、色あせた時代遅れのドレスが優雅に舞うその姿は確かに美しかった。

「それに」

急に、シルフィーの表情が変わる。次の瞬間には、手の位置が変わり、リードが変わっていた。それについてこれるローラもすごいが、

「リードもできます。ちなみに、ジャズ、タンゴ、ブレイクダンスから、獅子舞、てんてこ舞いまで習得済みです」

そう言い切って、最後は美しくローラと決めポーズを決める。

確かにおかしい組み合わせだったが、美しい物語を見たような満足

感があつた。呆然と二人を見ていると、隣からぱちぱちと拍手の音が聞こえた。

さすが、父王。一番に称賛の拍手を送られるとはさすがヴァルセイルの賢王と言われるだけある。僕も拍手を送ろうとしたとき、

「素晴らしい」

低く良く響く声が室内広がった。その声に導かれるように、すつとシルフィーとローラが頭を下げる。

「有りがたきお言葉」

「して、シルフィー殿」

その部屋に広がる声の質が変わった。僕には聞き覚えのある声、絶対的支配者の声、僕の仰ぎ尊ぶ王であり、畏怖する父の姿だ。

「今宵の宴だが、貴殿は誰かと予定があるのかね」

シルフィーも王の雰囲気が変わったのを感じ取ったのだろう。その面持ちにはいささかの緊張が見られた。

「いいえ、特には…」

「そうか、それはちょうどよい。…我が、息子カイルのともとして出席してはくれまいか」

「えっ！！父上、それは」

ダンスパーティーで、バレエやらブレイクダンス、獅子舞にてんて

こ舞い…って何！！を踊られたら困る。傍にいる僕まで恥をかく羽目になるだろう、それは我が国にも影響がある。思わず緋色の椅子から立ち上がり、父王に進言しようと思ったが、父王は花から僕など見ていなかった。

「…それは…」

以外にも、速攻でオツケー出すかと思われたシルフィーが躊躇している。

普段、あれだけ僕と結婚したいと言っておきながらどういうことだ？悩んでいる様子の彼女を父王はただ見下ろすだけだ。どの道結果は決まっているのだが、

「…わかりました。カイル様の供として出席いたします」

いかにも、無理やり頷かせたかのような。後味の悪い中、楚々と部屋を出ていく彼女の背中を見送った。

部屋に戻り、椅子に深く座ると大きく息をついた。

ダンスパーティーを忘れていたこともあるが、なによりも、父王が急に言い出したことの方が気にかかる。何のために僕とシルフィーを一緒に出席させようとしているのだろう。

その…ダンスパーティーも含め、社交界に出席するということは、そういう関係だと思われても仕方がないことだ。

ということは、父王は僕とシルフィーを結婚させたいのか？

まさか、そんなそぶりは全くない。

それに、

コンコン

考えを巡らせていると、ノックの音が響く。特に気にすることなく、いつものように「入れ」とこたええると、ガチャンと品のない音とともに初老の男性が入ってきた。

「カイル王子!!」

その声を聞いたとたん後悔した。だが無碍にすることもできず、声をかけた。

「どうされました、ウェイノルド殿」

「どうしたもこうしたも、どういうことですか!!」

でっぴりとしたおなかに、君が悪いほどに整ったひげ、頭の…は触れてはいけない、彼はこの国の將軍の一人で、次期総帥と言われているほどの男だ。この男は、武家の出身というわけではないが、策略の才に恵まれ、他の者を蹴落としてはこの地位まで上り詰めた。正直僕はこの男が苦手だ。出世のためなら何をしてるかまわないというのが見え見えでいつ利用されるかわかったものじゃない。こんな男を傍に置いている父王はすごいと思う。

「そう言われましても理解できないのですが」

「王子!!」

その男が息まいてやってくる理由なんて最初からわかっているが、
どうやら逃げられそうもない。

「パーティーにフィルメリアの女王と出席されるそうですね」

「ああ、父が決めたことだ。フィルメリアも同意している」

覆しようがないということを含めてうなずく。

「全く、王も何を考えているのだ」

大きなため息をつきながら彼はいった。尊敬する父王のことを言われ腹が立ったがここは何も言わないでおく。

「国王とはいえ、格下の、しかも属国の女などと、変なうわさになれば、王子、いや国の恥になるというのに」

目の前の男はそう吐き捨てるようにいうと、僕に同意を求めるかのように、笑いかけてきた。

なぜだろうか、一瞬、怒りににも似た感情があふれそうになったが、それを止めたのは、男が話をつづけたからだ。

「王子には、私の娘ユーリエという婚約者がいるというのに」

歴史とはじまり

その言葉に凍りつくように感情は消え失せ、代わりに罪悪感に似たようなものが胸によぎる。

「そうだな、父は何を考えているのだろうか」

この問いに答えられるのは、目の前の男ではない。

「だいたい、あの国は気に入らないんだ、王子はご存知ですか？あの国の歴史を」

「いや…」

僕がいい淀むのを見ると、男は露骨にため息をついた。

「あれは、反逆者の国ですよ」

頭に浮かんだのは、色あせたドレスを着た、茶色の髪の女性。なぜか鹿にまたがり、アマゾンの中を野生の動物のごとく駆け巡っている（これは勝手な妄想）。意味もなくいつも笑って、うそみたいで本当の話（本当につその話もある）をうれしそうに語る女性だ。彼

女に反逆という言葉は、似合わない。

「あの国は、流れ者が集まった国のはず、我が国とは一切のかかわりもないだろう?」

歴史書に書かれた内容を答えれば、男はわざとらしいため息をついた。

「もとは流れ者の集まりですが、それだけで、国と認められるはずなどないでしょう?」

……、そうだ。大陸から離れた島国とはいえ、ヴァルセイルの隣国であるこの国がどうして存在するのだろう。どの歴史書を読んでも、ヴァルセイルと交戦した歴史もなければ、ヴァルセイルが支配した時代もない。

はじめて感じる違和感は、収まりが効かない。

「我が国の王子があのに逃げたのですよ。戦争怖さに」

「へ?」

一瞬自分のことを言われているのかと思って、寒気がした。

「我が国の優秀な兵士を1部隊連れてそのまま、あの島に逃げ込んだ拳句、非戦争だなんてほざいて、民を率いて国を名乗るなんて、恥知らずもいいところだ」

ヴァルセイルの王子がフィルメリアに逃げだした?

そんな話聞いたことない。

「…シルフィー女王は、我らヴァルセイルの王家の血を引いているのか？」

僕の言葉に大した意味を見出さなかったのだろう、男はさらりと答えた。

「そういうことになりますかな、しかし、数百年も前の事、ましてやこれは、最高機密事項です。フィルメリアの王がこのことを名乗ること自体罪になる、実質無関係と思っていただいて結構ですよ。所詮弱小国だ何もできないはしない」

「そう…か」

何だろう、何か引っかかる。

「…ウェイノルド殿、フィルメリアは」

わからないことだらけだ。きっとこのこと他に誰も教えてくれる人はいないだろう。今、すべてを聞かないと、

「ところで、今夜のダンスパーティーですが」

「え？」

あ、忘れていた。

「王命ですから、あの女王と一緒に出席なさるほかない」

「まあ、そうなるな」

「ですから、殿下は最初に我が娘ユーリエをダンスに誘ってください」

男は顔近づけて、力説してくる。唾かかるから、離れてほしい。

「妥協案ではないが我が家のメンツも我が娘の顔も立てられます。何よりも、王子の婚約者はユーリエなのですから、当然のことです。それなのに、あのフィルメリアの女狐が、余計なことを」

「王子、準備はよろしいですか」

扉越しに声がかかる。この声はローラか。

「…ああ」

返事の後ゆっくりと扉が開く、そして、無表情のローラは扉を開くとすぐに部屋の隅に下がる。

そして、開かれた扉の先にいたのは、

踊るつもりが踊らされて

花のように鮮やかで目を見張るようなドレスでもなく、
輝きを放つ美しい宝石でもなく、
金色に輝く細工でもない…

「シルフィー殿、ドレスならお貸ししますが」

失礼とわかっていても、思わず言ってしまった。
だが、彼女は笑顔で首を振った。

僕の前に立つシルフィーは、それはまるで、侍女か女官のようだ。
少なくとも、一国の王のすべき姿ではない。

「お言葉ですが、その姿はダンスパーティーにはふさわしくないかと」

「いいえ、これでいいんです」

飾り一つないスカートに、露出一つないきつちりとした服装、ただ
まとめられただけの髪、普段の格好の方がまだドレスを着ているだけ、
高貴な存在だと思われるだろうが、この姿では、本当に、

「王は申されたではないですか、『カイル王子のともとして出席してほしい』と」

「さすがに、僕にも立場があります。貴方と一緒にいると」

いると……

「今宵は、供として、貴方につき従いましょう」

「え？」

「王は、私に貴方のパートナーとして参加してほしいなんて言っていない。ヴァルセイルの次期国王たる貴方の隣に立つつもりなんてありません。それに、私も王です、意味は承知しております」

何事でもないように、いつもの冗談めいた話を言っているのと同じように、彼女は笑顔を向けながらそう言う、僕に背中を向けた。

「まいりましょう」

そういうと、彼女は僕よりも先に一步前に踏み出した。

静かに礼をするローラが視界に入る。

女性の前に立って、扉を開いて、手を差し伸べて……エスコートしなきゃいけないのも知っている、それにそれなりに学んできたつもりだ。

それなのに、僕は、その背中を見ながらついて行った。

「王子、結婚してください」

やけに明るくてはつきりとした声が頭に響いた。

すぐに幻聴だとわかる。

だって、彼女は目の前で、紳士…ジュ何とか卿と話しているのだから。

「ジュメジュヨリユ卿、それでは、またあとでお話しいたしましょう」

ボーとしている間に、話が終わっていた。ジュメジュメ卿？って一体何者だったのだろう。

スカートを軽く上げ礼をすると、彼女は僕に振り返った。

「王子、少し休憩にしましょうか」

「え？ああ」

シルフィーについてテラスに出る、中のこもった空気から解放されて思わずため息が出る。

「飲み物をとってきますね」

「いや…」

自分で取りに行く、と言おうと思ったが、なぜだか、彼女に取りに行かせるのが正しい気がして、そのまま見送った。

夜空に交じってしまいそうなほどに、シルフィーは地味で目立たない。朝の城を凌駕するかのような存在感も奇天烈な行動もない。

困ったことに、本当に困ったことに、彼女は何も問題がないのだ。

それどころか、間違いなくこの国の王子である自分より知り合いも多いし、場馴れしている。知らない相手でも、マナーどおりに相手し、いつの間にやら、王子である僕の話に持っていつている。

「よう、カイル」

聞き慣れない呼び捨てが、自分と呼ぶものだと感じて振り返ると、そこにはルビーのように煌々とした赤毛の男がいた。

「ルジート王子じゃないですか!!」

我が国の南方に位置する、ルジリア王国の第一王子だ。我が国と同じように武力にたけた国で、その国の王子である彼とは幼いころからの付き合いだ。

「卒業はまだじゃなかったんですか」

「ああ、来月だ。で、その次にはお前が入学か」

「はい」

僕よりも4つ年上のルジート王子は、今、各国の王族・貴族が多数在籍する世界屈指の学校に通っている。文武ともに優れた彼は、僕の目標であり、超えるべき存在だ。そして、次の春には、僕は彼の通った学校に入学する。

「じゃあ、俺たちの世代じゃお前が三人目か」

何かを思い出すように、遠い目をしながらルジート王子は言った。

「何がですか」

「ん？あの学校の入学者」

「えー！誰かいるんですか、ルジート王子以外に」

あの学校は、そう誰もが入れるわけじゃない。家柄だけでなく学業に秀でたもの、数度の試験に合格したものしか入れない。この近辺からは、ここ数年、ルジート王子以外の入学者はいない。

「…あれ？カイル、お前」

「お待たせいたしました」

ぱつと目の前に差し出されたのは、グラスに入った真っ赤なワイン。葡萄の香りがずっと鼻を通る。

「久しぶりですね。最後にお会いしたのはいつでしたっけ」

ルジート王子が外向けの笑顔を作ると、シルフィーに声をかけた。

「あら、口説いてくださるのはうれしいのですが、私はカイル王子に魂までささげているので、お相手できないんです」

魂って重いんですけど。っていうか、よその人の前でやめてくれませんかー！

さらりと流しながら、シルフィーはルジート王子の前にもワインを

差し出す。ルジート王子も笑顔で受け取る。

「シルフィー王のお飲物を奪ってしまったようですね、おい、君」

ルジート王子が近くにいた給仕に声をかける。だがそれは、シルフィーが止めた。

「飲酒運転だとかまってしまいますから」

え！もう日も暮れているのに、船（アヒル号）で帰るのだろうか。そもそも、誰につかまるんだ？

「海と正義と愛を守る男たちにです」

誰？

「ハハハ、相変わらず、面白い人だなあ。それより、最近はどうな研究しているんです」

「そんな研究というほどのことでもありませんが、とある男性の寝起きから朝一番のツッコミまでの時間とキレを調べておりますの」

それって、間違いなく自分研究されているよね。っていうか、研究じゃないからそれ。

「冗談が好きですね、シルフィー王は。この間も論文を出していたじゃないですか、防災工学でしたよね」

「先日の嵐で地滑りが起きたので、その対策を考えただけです。といても、我が国には実施するほどの余裕はありませんから」

あれ？以外に真面目。

「……もったいないと思うのは、私だけじゃないんですよ。シルフィー王」

少し悲しそうな顔を見ると、ルジート王子はちらりとダンス会場の方を見た。

「申し訳ない、父が呼んでいるようです。失礼させてもらいます。じゃあな、カイル」

簡単な挨拶だけ済ますと、ルジート王子はさっと駆けて行った。最後に僕の耳元に、一言告げて、

「あの人は別格だ」

そのあと、二人でいろんな人と挨拶をして回った。政治・経済・サッカーに相撲…、どんな話題にも笑顔で答え、言葉が通じない相手にもさらりと通訳もこなす彼女に、当然だと思ってしまったのは、感覚がマヒしてきたからだろうか。

最後に、ユーリ嬢に声をかけ、ダンスを踊る僕たちを彼女は笑顔で見守っていた。

もう一度響く声、

「王子、結婚してください」

いったい、

彼女は何者で、

何を考えているんだ？

謎が謎を呼ぶ

「王子、紹介したい人がいるんです」

頬を染め、いじらしく（？）もじもじとしながら彼女は言った。

紹介したい人？人？ひと？ヒト？

オウムのように同じ言葉で聞き返しながらも、視線はどうしても一点に向けられてしまう。

彼女のくたびれたドレスのすそに体半分隠して、こちらをうかがうように見ているその存在。

身長は小柄で彼女の腰辺りに大きな頭があり、異様に大きな瞳は真っ黒で鈍い輝きがあった。それでいて、大きな頭に似合わず体は異様に細く、胴体から延びる手足は異様に長いのだ。

そして、何よりも、全身真っ白で異様な光沢があるんですけど！！

「いや、人じゃないよね。人かもしれないけど、はるか銀河を超えてやってきてるよね」

僕の言葉に、シルフィーはうれしそうに笑った。

「あら、お知り合いでした？」

知らない、まったくもって知らないけど。どこかの国で、引きづられている写真がなかったかな？というか、手術台に乗っかっていたような写真がなかったかな。

フフフと笑って、シルフィーは応える。

「そういえば、彼の一族は世界的に有名ならしいです。銀河系で一番だなんて言っていましたから。本当に面白い人ですね」

銀河系で一番って…なんで笑っていられるんだ、シルフィー!!

「では、正式にご紹介いたします。こちら、——（人間では発音不可能）さんです。——というのは、こっちの言葉で天空の侵略者という意味だそうです。親御さんも素敵な言葉を選ばれましたよね。この青空みたいに大きくなってほしいという願いが込められているのでしょうか」

ちよつと!!! 侵略者って!!! 青空どころか、曇天に雷が鳴り響くような地獄絵図しか思い浮かばないけど。

そっいいながら、彼女は、彼、——さんを我々によく見えるように前に押し出した。満面の笑みを浮かべる彼女に対して、彼——

——さんは、わらって? いや、おこっているのか? ああ!! 表情読み取れない!!

「こちら、ヴァルセイルの王様とその王子様のカイル様です。金髪碧眼で、性格温厚、才色兼備なうえ、手足の長さ、細身の腰元、首筋にほのかなエロスを感じさせてくれる、王子の中の王子様です」

変な紹介やめて、ちよつ、すっごい見てる、こっちすっごい見てる。

「うむ、ヴァルセイルは貴公を受け入れよう」

えええ!!! 受け入れちゃっていいの? 未知の神秘。そっいつて、父王は——さんと握手をした。

これ世界的に奇跡的な瞬間を目にしているような気がするんだけど、さつきから、パシャパシャ、うるさいと思ったら、

ローラー……！

何写真撮っているの！？

っていうか、父王に体の向き変えさせたり、————さんに視線注文したり、意外に細かい……！
現像したら、後で見せてほしい……

じゃなくて、

「シルフィー殿、こちらの方はどちらからいらしたのかな？」

———さんは、細長く白い指を天井に向けた。がシルフィーは笑顔で答えてくれた。

「北の方からと伺っております。やはり、北国の方は色が白くてもつちりとした肌なんですネ」

うらやましそうに言っているけど、その肌、なんか光っているし、ゴムみたいにしか見えないんだけど。っていうか本人空指しているよね。

「どうやら、旅行中に船が壊れてしまったようで、うちの山の中に墜落して倒れていたのを、猟師仲間の権兵衛さんが見つけてくださって……でも、怪我がなくて本当によかったです」

山に船って、あれだよな。ああいう感じの船だよな。楕円形の……。

「その船がなかなか特殊な仕様でできていて、修理ができない状況だということです」

「それはさぞかし困っていることだろう、我が国にできることはないのだろうか」

「ええ、仲間との連絡は取れないそうです。そのため戻る手段がなく、一人きりだということです。それに、……どうやら、——さんは、この国とは体が合わないらしく、あまり長時間いられないそうです」

たしかに、——さんのいた世界とは違うのだろう。しかし命の危機となれば、何かできることはないかと考えてしまう。

「ですから、体がほしいそうなんです!」

悲痛な声が部屋中に響く。シルフィーは耐えきれない、という風情で顔を伏せ、父王はぐつと唇を噛んでいる。ローラに至ってはなぜかハンカチで目元をぬぐっている。

「もう、半日しか持たないそうです。それまでに体を見つけないと……」

「……………」

重い空気が満ちる。

「——さんは、こちらの世界でそれなりの身分があり、若

く、美しい体じゃないと適合できないといっているんです」

…何だ、その贅沢は、身分があつて、若く……。
あれ？

なんで皆さんこつち見ているんだ？

ちよつと！…やめて！！

きつと王子の身分でこの星を乗っ取ろうとしているんだ！！
ヴァルセイルには、国力もある、他国に与える影響は大きいんだ！！
みんな、目を覚ましてくれ！！

「うわあああああ！！！」

調べ物は自分でしましょう

疲れた体をそのままソファになだれ込ませる。

疲労はそのまま睡魔に変わり、そのまま流され瞼を閉じようとしたとき、

気配を感じた。

すぐに剣の柄を握り構えるが、相手を悟って、気まずさに苦笑いをする。

「済まない、呼び出したのは僕なのに」

その気配から声が聞こえるが、姿を見せることはない。闇に隠れたままの相手に声をかける。

「早速だが、頼みがある」

「貴方が直々に私を呼び出すとは、大仕事になりそうだ」

そつだな……かすかに胸に残る罪悪感から、目をそらすようにして、彼にいう。

「フィルメリアの王について調べてもらいたい」

その夜から数日後。特に何も無い日、日常と言っていい日。朝から

たたき起こされ、小一時間ほど無駄話に突っ込みを入れ、食事を終え、束になってやってくる書類との格闘が始まった。太陽が城を真上から照らす時間になっても終わりの見えない書類に、思わず頭を抱えてしまう。

賢王と言われる父は遠い。

思考が外にそれていったのを、類に戻そうと、再び下を向こうとしたとき、

チチッ

背後から小鳥の鳴き声が聞こえた。

反射的に振り返ると、窓際に茶色の鳥がとまっていた。その鳥は一度だけ不思議そうに僕を見ると、そのまま空に飛んで行ってしまった。

疲れているんだな、ふつと息を吐きながら机に視線を戻すと、そこには先ほどまでにはなかった封筒が、書きかけの書類の上に乘っていた。

ごくりと唾を飲み込むと、その封筒を開く。

飾りけなど一切ない、気持ち悪いほどにくせのない字が広がっていた。

シルフィー・エルフォリア・クロイツ・スイ・フィルメリア

この名前の後には、彼女の名前の由来が長々と書いてあった。ひい

おじいさんの愛称だとか、彼女の祖先の出身地の名前だとか、彼女の祖先が小説で一発当てた時の主人公の犬の名前だとか、延々と書いてあった。関係なさそうなのでそのまま読み流す。

性別 女

これは知っている。

「これって」

この下に続いたのは彼女の経歴。

先代の王と粉屋の娘であった王妃との第一子。

王妃は出産後体調を崩し、亡くなっているようだ。

その後、彼女の教育係としてついたのは、リハルト・ウェイノルド。

…当時のウェイノルド家の嫡男だ。そして、現ウェイノルド家の当主の兄にあたる。

先日のウェイノルド殿のフィルムメリアの対する、明らかな悪意はこのためだったのかもしれない。

裏切り者、そう言い切った言葉には、きっとこの兄に対するものも含まれているだろう。

そして、その頃から、シルフィーの才能は開花してきたようだ。

国の蔵書をすべて読み漁り、フィルムメリアと交易のあった国の言語を身につけ、耐震住宅の設計に一役立て、魚群探知機の改良に尽力し、なわとびの新たな飛び方について研究を重ねていた。

神童という名をほしいままにしていた彼女の転機は12の時だった。僕が次の春入学する予定の学校から使いが来たそうだ。才能ある子供に水準の高い教育を受けさせたいと、学校から申し出たようだ。

その後、彼女は学校に入学、農学、工学を修め、経済学を専攻中、ちょうど二年前、先代フィルムメリア王の崩御とともに、学校を退学、王位を継いだそうだ。

「ルジート王子の言っていたことが…」

ここに書かれているでたらめな経歴。しかし、本当に彼女が歩んできたものなのだろう。

だが、別格と言われる彼女がいったい何を考えているかなんてわからない。

ヴァルセイルのものであった、リハルト・ウェイノルド。彼からヴァルセイルとフィルメリアの歴史については聞いているはずだ。戦争から逃げ出し、反逆者、裏切り者と言われる王家の末裔。

神童と言われ、今でもその才を十分に持っている女王。

僕自身も、努力してきた。この国治めるために必要なものを必死になって学んできた。

だが、まだ僕は王子だ。そして、何かを成し遂げたこともない子供だ。

もし、彼女がこの王位をねらっているとしたら、

僕と彼女はたたかうことになるのだろうか

苦い思いをかみしめながら次のページをめくる。

Q、貴方のお名前を教えてください。

A、「シルフィーです」

Q、貴方の職業は？

A、「女王です」

Q、好きな食べ物は何？

A、隣にいたシカをちらりと見ると、笑顔で、
「味噌煮込みうどんです」

なんじゃこりゃー！！！！

なにこのインタビュー形式！？っていうか、本人答えたの？

隠密に頼んだ意味全くないでしょ？っていうか、めっちゃ、仕事やる気満々だったのに、何これ！！

Q、昨今の教育現場についてどう思われます？

A、「そうですね、学力低下について世間は騒がれ、教員のスキルアップ、教育体制の改編など言われていますが、教育現場と言うよりは社会全体の体制の改編が必要かもしれません。現行のシステムですと、…」

Q、先日公開されましたチフリ最新作「となりの崖の上の動く城」はいかがでしたか？

A、「評論家の方がたの間では、賛否両論がありますが、私はすばらしい作品だと思いますね。特に神隠しに関する神秘性の表現はすばらしかったです。それに、女の子と男の子の恋愛も甘酸っぱくて素敵です。主題歌も有名なカントリーな道ですから、お子様も楽しめると思います」

あんなたらなに話しているの！？

案外和気あいあいと過ごしているんですけど！！

っていうか、シルフィー意外にのりのりじゃない！？

あんな黒づくめの不審な男に、あっさり答えちゃうの？

Q、初恋の人は？

A、「カイル王子です！！もうあの、柔らかそうな金髪のなびく様、美しい瞳に、それを縁取る長いまつげ、バラ色の唇に、なんといつでも、優しい笑顔！！拾った髪の毛眺めるだけで、ごはん3杯はいけます！！」

拾った？拾ったってどういうこと？！

Q、ほしいものはありますか？

A、「…難しい質問ですね。多々問題はありますが、私は人に恵まれ、平和な時を過ごしています。これ以上を望むのはいけないのですが、わがママを言っていていいのだとすると、家族…ですね」

家族？

そうか、生まれた時に母を亡くし、2年前に父を失っているんだ。

Q、では、最後にカイル王子にひとことお願いします。

A、「王子、結婚してください」

結婚、それは家族を作ることだ。

だが、それは一般的な家庭における認識、

僕は軍事国家ヴァルセイルの次期国王であり、

彼女は、フィルメリア、属国であり弱く小さな国の王。

結婚してくださいなんて簡単に言えるはずがない。

それなのに、

それなのに、

僕は、聞き慣れたこの言葉を見るだけで、
気の抜けた笑みをこぼしてしまう。

これでは、何も進展しない。

実際に何も分かっていないのだ。

気持ちを引き締め最後のページをめくる。

そこには、

ローラと肩を組んでピースをしているシルフィーの写真があった。

って言うか、ローラなぜいる？

いや、ローラならいてもおかしくない。むしろいるにきまっているじゃないか。

ひきつる口元を押さえ、写真の裏を見ると、

『なんかいい人ばかったので、直接本人に聞いてみました。

それに、尾行をしていた私を尾行するメイド様がいたので、これからはその方を師として仰ぐことにしました。

というわけで、これからしばらくローラ師と山にこもります。

報酬は銀行に振り込んでおいてください。

かしこ』

僕の周りこんな人ばかりいー！！

知らないものを知る、それは

「もう一度言っただけですか？」

隣にいる父王が僕の方を見る。その目は、王の目。絶対的力を持つ者の目だ。そんな目で僕を見ながら、父王は言う。

「フィルメリアに行け」

呆然とその言葉を受け止める僕に、父王はもう一度言った。

「フィルメリアに行け」

「なぜ…ですか」

「お前の世界は狭すぎる。お前は、この国を継ぐものだ、他国のことを知ること重要だ」

ありきたりな建前。けれど、父王らしくない。それに、気になる。

「どうして、フィルメリアのですか…」

同盟国ならルジリアだってある、他の国でもいいはずだ。

そう尋ねたが、父王は僕の目を見るだけで何も言わず、そのまま背を向け行ってしまった。

父王のことだ、裏で画策する僕の行動などすべてお見通しなのだろう、その上で解決しろと言っているのだ、自分の手で。

フィルムメリアを、
シルフィーを、
歴史を、

真実を、
知りたいのは僕自身だ。

パッパ―

広大な海に向かってラッパの音が響く。世界は広い、城の中ではよく響くこの音はあつという間に余韻ごと消えていった。

見事に整列された軍服の集団。その集団の中心にいるのが僕だ。物々しい、そう思いながらも僕は守られる。

太陽の光を反射して輝かしいばかりの海を前にして、息をのむ。そして進む。

一歩歩くたびに、兵士たちが敬礼をしていく。その列を超え、栈橋を渡ると、目の前には、

一隻のふ、
じゃなくて、
一羽のアヒルがいた…。

「え」

そのアヒルの中には、満面の笑みの女性。

「……………」

ゆつくりと、後ろを振り返ると、敬礼をしたまま微動だにしない兵たち。

もう一度アヒルの中をのぞく。

中の女性は笑顔のままなぜかグツと親指をつきたてた。

後ろを振り返る、

今回の護衛部隊の隊長である男が敬礼したままグツと親指をつきたてる。

一人…ですか？

一応、王子なんですけど、

一応、他国に訪問するんですけど、

一人…なんですね。

「今回のために改造したんです!!」

潮風が冷たい。けれど、太陽はまっすぐに水面を照らしている。きらりと光る水面は美しいというよりもまぶしすぎる。

「その名もアヒルちゃんG.O!!いちやいちやバージョン」

…いちやいちや

いやな予感がする。

シルフィーは楽しそうに笑いながら、手元の赤いボタンを押す。
いやな予感しかない。

ウィーンという音とともに、足元が変形していく。そして、船のスピードが遅くなった。
現れたのは！！

ペダルだった。

予想通りというか、なんというか、切ないんですけど。

ばちゃばちゃ…

進まない、というか

「流されてない！？」

彼女は周りを見渡し、「そうですか？」なんて暢気なことを言う。
いや、マジで、このまま漂流とかいやだから。

「仕方ありませんね」

そういうと、彼女は手元の青いボタンを押した。
ようやく、モーターにもどすのだろうか？
ウィーンという音とともに座席が変形していく。そして、船のスピ

ードが遅くなった。

シルフィーの座席が近くなった。

「これがいちゃいちゃモードです。肩が触れるほどの距離!」

一人でキャツキャツ言い始めたシルフィー（確かに肩は触れている）
。
あれ？

よくよく見ると、シルフィーの足、動いていない。

「デメリットは、私の足が届かなくなるので速度が落ち、カイル王子が疲れます」

余計なもんつけるな!!

「仕方ありませんね」

そういうと、彼女は手元の緑のボタンを押した。
今度こそ、モーターに戻るのだろうか？

ウィーンという音とともに足元が変形していく、そして、船のスピードが遅くなった。

現れたのは、

ガラス張りの船底だった!!

「これがいちゃいちゃモード2ndです。二人で海面観賞！！肩が触れる距離！！」

一人でキャツキャツ言い始めたシルフィー（確かに海面は見えるが、魚どころか海藻が流れるのしか見えない）。

あれ？

足が冷たい。

「デメリットは、海水が入り込んでしまうんで、最悪沈みます」

余計なもんつけるな！！っていうか、早くやめて！！

「ご安心を、自動排水装置がありますので、20分は二人の世界を楽しめます」

そういう問題じゃないから！！

潮風が冷たすぎる。太陽は眩しいというか、目に刺さる。隣のシルフィーはハンドルを握ったまま前を見ている。風で茶色の髪が揺れている。こんな船旅をほぼ毎日しているのだ、日に焼ける

はずだ。いや、彼女のことだから他にもいろいろやっているのだらう。

「カイル王子はもうすぐあの学校に行かれるんですね」

「ああ」

「きつと、戻ってこられるときには見違えるほどにかわっているんでしょうね」

あの学校には試験や下見のために何度か行っている。授業風景も見だし、学生たちの成果も見てきたが、実際にあの学校で学んだからと言って何かが変わるとは限らない。

「どうだろうな」

ただ、どうありたいかはいつも考えている。

「謙遜なさらないでください。王子は国のために行くんです。私は私のために行ったんですから」

笑って言う彼女は、天才と言われ、学校を去った今でさえその名は広がっている。

僕はまだ父王やヴァルセイルという国に守られている。だからこそ、学ばなければいけない。

何かのため、

自分のためだろうが、誰かのためだろうが、
重さは変わらない。

何を変えるか、
何をなすかは、
全て自分次第なのだから

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1662p/>

貧乏姫の結婚

2011年4月2日12時18分発行